

国民的スポーツ・野球の普及に貢献

豊中市少年野球連盟

日本では軟式野球ボールの開発により少年野球が普及し、野球人口のすそ野を広げられました。豊中市では、昭和35年（1960年）に初めての少年野球大会が開催されるなど早くから活動が盛んです。豊中市少年野球連盟は昭和57年に発足し、少年野球の普及・推進を担ってきました。現在は市内41小学校のうち31校が登録。春・夏・秋の大会では、メンバーの多い学校は複数チームを編成するので、50チーム以上が参加しています。

会長の杉浦保夫さんは「豊中市は小学校単位の活動なので、どの学校にも平等にチャンスがあります。野球を通じた青少年の健全育成が最大の目的ですが、試



合に勝つことは子どもたちの喜びと自信につながります」と話します。
昭和54年から2年ごとに行き来している米国サンマテオ市との姉妹都市親善交流事業では、ホームステイと交流試合を通して友好を深めています。



サンマテオ市のチームと交流試合

年齢に応じた練習を学年別に指導

豊中ラグビースクール

フェアプレイの精神でチームプレイに徹し、試合後には敵味方もなく健闘をたたえ合う。そうした精神性に加えて、走る、投げる、蹴る、当たるなどの様々な要素を含んだラグビー。来々40周年を迎える豊中ラグビースクールでは、3歳から中学生まで約170名の生徒が年齢に応じたルールでラグビーを楽しんでいます。



マリノフド豊中マルチグラウンドでの練習風景

「ラグビーはハンドリングとランニングが基本というシンプルなボールゲーム。それを生徒、保護者、指導者の誰もが楽しめることをめざしています」と話すのは、校長の中村夫左央さん。スクールの特徴として、安全管理には最も気を遣い、体調不良の生徒は参加しないことを徹底しています。
大庭正彦運営委員長のもと、指導者と保護者のコミュニケーションを重視して、仲が良いのも特徴。「天然芝の豊中マルチグラウンドは転んでも痛くないので子どもたちが思い切りプレーできます。グラウンド管理にも協力して大切に使っています」と話すのは運営委員の澤田章太郎さん。



全国高校ラグビー大会80回記念碑台座に大会の経緯が記され、豊中が高校ラグビー発祥の地であることを伝えています。(阪急豊中駅前広場)



高校野球発祥の地 記念グッズ

豊中市では、応援したい自治体に寄附ができる制度「ふるさと納税」の返礼品として平成29年度・30年度限定で「高校野球発祥の地記念グッズ」を設定しました。



- ①高校野球発祥の地 記念切手(写真)
.....1万円以上の寄附をされた希望者
- ②高校野球発祥の地 記念ボール(写真)
.....3万円以上の寄附をされた希望者
- ③高校野球発祥の地 記念切手&記念ボール(写真)
.....4万円以上の寄附をされた希望者

※詳しくは豊中市ホームページをご覧ください。



近代スポーツの系譜をたどれば、その多くが豊中にたどり着くといっても過言ではありません。大正の初めに豊中運動場がなければ、高校野球の隆盛もラグビーやサッカーの普及も、戦後がスタートラインになっていたかもしれません。
スポーツはまだまだ「特別なもの」でした。しかし、野球の全国大会の翌日には近隣の職場チームが、豊中運動場で試合をし、国際陸上大会の翌週には小学校の運動会が開かれました。スポーツを誰もが楽しめる身近なものにしたのも豊中運動場でした。
豊中運動場の跡地は現在、閑静な住宅地になっています。すぐそばにできた「高校野球発祥の地記念公園」が高校野球の原点を刻んでいます。その果たした大きな役割を、もっと多くの人に知ってもらいたいと思います。

歴史に「もしも」は禁物といわれますが、ここではあえて持ち出します。もしも、大正2年（1913年）に豊中運動場が開場していなければ、日本の近代スポーツのスタートは40年以上遅れていたでしょう。
大正年間にわずか9年間存在したに過ぎない豊中運動場は、今なら中学校の校庭くらいの規模ですが、当時は「東洋一」のグラウンドでした。
豊中市は、高校野球発祥の地として知られています。が、高校ラグビー、高校サッカーも豊中運動場で誕生しました。日本初の陸上選手権（日本オリムピック大会）が開かれ、国際大会に送り出す選手選考の場ともなりました。バレーボールやバスケットボールの初の公式戦が行われたのも豊中運動場でした。



※松本泉氏は、豊中運動場開設100年を迎えた2013年5月から「豊中運動場100年」と題する連載記事を開始。その連載は90回を超え、現在も続いています。

日本の近代スポーツと豊中運動場

毎日新聞論説委員 松本泉